

研究会における主な意見

第 1 基本的枠組み

1 枠組みの全体像

労働・雇用分野における障害者権利条約への対応については、どのように考えられるか。その際、既存の障害者雇用率制度はどのように位置付けられるか。

<主な意見>

- 合理的配慮だけでなく、条約の目的、障害の定義、自立生活、差別の禁止及びモニタリングは相互不可分ではないか。(第 6 回・藤井氏)
- 合理的配慮については、差別禁止の構成要件の 1 つ(合理的配慮の否定は、障害に基づく差別に当たる)としての位置付けと、使用者側も障害者側も歩み寄って障害者の社会参加を促進するためのアプローチとしての位置付けと、2 本立てで捉えるべきではないか。(第 9 回・今井委員)
- 全体の枠組みとして、差別禁止→紛争解決手続、という点が強調されているが、むしろ、1 人 1 人違う合理的配慮を通じて障害者の雇用を促進していけるよう、合理的配慮についての理解を深め、定着させていくための仕掛けが必要ではないか。(第 11 回・今井委員、大久保委員)
- 権利条約は、今までの障害者雇用施策(行政が企業に対する助成を行い、物事を進めるアプローチ)と 180 度異なり、合理的配慮が個別の労働者との関係で問題となる以上、個別の労働者が権利要求なり何なりのアクションをしない限り何も動かないことになるので、紛争解決のための支援も含め、考えていく必要があるのではないか。(第 10 回・岩村委員)
- 国や県の委員会等、外部機関による紛争解決は必要ではあるが、当事者間の自浄作用を促進するような仕組みがやはり必要ではないか。(第 8 回・今井委員)
- 現行の割当雇用制度・納付金制度は、障害者雇用を現実的に確保していく施策であり、いわゆる積極的差別是正措置として考えられるのではないか。(第 5 回・大久保委員/同旨意見…今井委員・花井委員)
- 英米でも、差別禁止だけでは障害者雇用の実態はそれほど改善されておらず、補足的に、積極的措置という形で雇用率制度が必要ではないか。ただ、制裁的なものだけでなく、事業主が自ら取り組むような仕組みと両方が必要ではないか。(第 9 回・松井委員)
- 現行の障害者雇用率制度がポジティブアクションとしても、採用段階で差別禁止が

なされるのであれば、納付金の徴収はなくすという考え方もあり得るのではないか。
(第10回・平田氏(田中委員代理))

- 差別禁止措置を、労働関係法令の中でやるのか、横断的な差別禁止法を設けるのか。やはり、差別禁止法という形でやるべきではないか。(第5回・大久保委員)
- 雇用における障害を理由とする差別を禁止する法律が必要ではないか。また、そこでは、「障害を理由とした差別は無効」等、その効果も規定すべきではないか。(第8回、第11回・花井委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

権利条約は、〔中略〕職場における合理的配慮の提供を締約国に求めている(第27条)。

一方、権利条約は、「障害を理由とする差別」とは「障害を理由とするあらゆる区別、排除又は制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のあらゆる分野において、他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を認識し、享有し、又は行使することを害し、又は妨げる目的又は効果を有するもの」であり、合理的配慮の否定もこれに含まれると定義しているところである(第2条)。

このため、障害を理由とする差別の禁止と合理的配慮との関係をどのように理解し、国内法において位置付けるか問題になる。

2 差別禁止等の対象範囲

差別禁止・合理的配慮の枠組みの対象となる障害者及び事業主の範囲をどのように捉えるべきか。また、その対象となる「雇用」の範囲をどのように捉えるべきか。

<主な意見>

- 合理的配慮の対象障害者は、雇用率対象者に限定せず、障害が理由で差別される人全てを対象にすべきではないか。(第5回・今井委員/同旨…東氏)
- 雇用促進法はどちらかというのアファーマティブアクション的なもので対象を絞ることは理論的に可能であるが、差別禁止は条約上全ての人を対象としており、その対象を特定の障害者や重度障害者に限定することは理論的にできないのではないか。(第6回・東氏)
- 障害者の範囲を法令上明確にするというよりは、配慮のアプローチの方法を定められれば、例えば「一定の支援が必要な人」など、緩やかな形で規定できるのではないか。(第9回・今井委員・大久保委員)
- 差別禁止枠組みの対象となる障害者の範囲を広く捉える場合、障害者であることをどのように確定すべきなのか(第6回・花井委員)。
- 過去に障害があったことにより差別的取扱いを受けている者や、家族の中に障害者がいるような者は、差別禁止枠組みの対象となるのか(第6回・今井委員/関連意見…東氏・松井委員)。
- 条約上の障害者の定義には、インペアメント(機能障害)だけでなく、社会的なバリア、環境上・制度上のバリアによって問題が生じている場合も含まれるが、それを定義づけることができるか。(第8回・松井委員)
- 使用者の範囲は、フランス・ドイツと同様、全ての事業主を対象とすべきではないか。(第8回・花井委員)
- 権利条約の中では、保護雇用・福祉的就労という言葉は使わず「あらゆる雇用」と表現したものであり、一般就労と福祉的就労の垣根をなくするのが条約の方向性ではないか。仮に労働法上「雇用」の枠があることを前提としても、差別禁止は全分野に及ぶので、合理的配慮は福祉的就労にも及ぶべきではないか。(第6回・東氏/同旨意見…藤井氏)
- 就労継続支援B型について、実際に作業レベルの高い方もおり、最低賃金を完全に適用させると今まで働いていた人が全て正規雇用できるわけではないので労働法全部と言わないまでも、ある程度カバーすべきではないか。(第8回、第11回・松井委員)
- 福祉的就労については、現実の問題として事業者の生産能力の問題もあり、また、

労働施策として位置付けるとすると最後は賃金保障の問題が必ず出てくるので、実態を見ながら整理するのは時間がかかるのではないか。(第8回、第11回・大久保委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について（論点整理）」

差別禁止の対象となる障害者の範囲は各国において異なり、フランス及びドイツにおいては、雇用率制度と連動させているが、アメリカにおいては広範に設定されているところであり、我が国において、差別禁止の対象となる障害者の範囲をどのように設定するのか、検討する必要がある。

アメリカにおいては、差別が禁止される事業主の範囲を、週20時間以上働く15人以上の従業員を雇用している者等に限定されている。一方、フランス及びドイツにおいては全ての使用者を対象としているところであり、差別を禁止する事業主の範囲についても、併せて検討する必要がある。

権利条約では、「あらゆる形態の雇用」に係る差別を対象として規定しているところである。これには、むしろ福祉的観点からサービス提供の是非、内容等が定められる授産施設等は含まれないと考えられるが、雇用契約を締結した上でサービス提供がなされる就労継続支援（A型）については、どのような形で適用できるか、さらに検討する必要がある。

第2 障害を理由とする差別の禁止

1 差別とは

障害を理由とする「差別」とは何か。具体的には、「間接差別」や「労働能力に基づく差異」は、差別に当たるのか。

<主な意見>

- 権利条約は、(ア)直接差別、(イ)間接差別、(ウ)合理的配慮をしない、という3つの差別類型があることを明らかにしている。この3類型が重なり合う場合があるので、(ア)(イ)だけでなく、合理的配慮を明確に位置づけなければならないのではないか。(第6回・東氏/同旨意見…今井委員)
- 合理的配慮を欠くことを、我が国の法制上、それ自体を第3の類型の差別と構成するのか(異なる取扱いをしていなくても配慮の欠如自体で差別と捉える)、直接差別に組み込んで考えるのか(異なる取扱いをすることに合理性がないので差別と捉える)、検討する必要があるのではないか。前者だとすると従来の差別概念と大きく異なってくるのではないか。(第10回・岩村委員)
- 差別の有無の判断基準(メルクマール)をどう理解するか。(第6回・東氏)
- 間接差別については明文の規定はないが、「あらゆる形態」の差別とか、「効果(を有するもの)」という文言の中で含まれていることは異論がないのではないか。(第6回・東氏)
- 間接差別については、男女雇用機会均等法改正の際には相当の議論があったように、実際にはかなり難しい問題なのではないか。また、差別禁止を検討するに当たっては、女性、若年者、高齢者等の他の仕組みではどうなっているかも見て検討する必要があるのではないか。(第9回、第10回・平田氏〔田中委員代理〕)
- 合理的配慮を提供した上で、労働能力と賃金や勤務形態(嘱託での採用等)の評価が真に釣り合うならば、格差があっても仕方がないが、問題は労働能力をどう評価するかということではないか。(第6回・東氏/同旨意見…松井委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

【間接差別】

権利条約は、障害者が他の者と平等に人権・基本的自由を享有・行使することを妨げる効果を有するものを差別と定義しており、また、アメリカ、フランス及びドイツにおいても、間接差別も禁止しているところである。

募集条件、勤務条件等において、外見上は中立的でも、障害者にとって相当の不利益(不都合)を与え、かつ職務とは関連のない条件を設定するなど「合理性」のない条件等を設定し、実質的に障害者を差別することは、このような間接差別に該当すると考えられるが、何をもって「合理性」

があるとするか（例えば、職場等での勤務が必要な職種・業務について、自力で通勤できることを募集条件とすることが「合理性」があるか否か）については、整理が必要である。

【労働能力等に基づく差異】

また、②の間接差別には該当しないが、障害があるために、知識面、技術面、身体面（移動その他の生活活動等）、コミュニケーション面等の一部の能力が十分でない場合に、当該能力に基づき職務能力を評価した結果として、勤務条件や賃金を異ならせることも、実質的に障害者の権利（特に採用）を実現する観点から、差別に当たるとの意見も聞かれるところである。〔中略〕

我が国においても、職務能力と採用基準、勤務条件、賃金等との関連性が各国ほど明確でない面があるとはいえ、職務能力がこれらの重要な判断要素であることは間違いなく、合理的配慮が適切になされた上でなお職務能力に基づく評価としての差異が生ずることをまでも否定することは適当でないと考えられる。

【合理的配慮の否定】

以上から、「合理的配慮」について、その位置付けについて、

① 合理的配慮を行うことを、一般的な使用者の義務若しくは労働者の請求権とするか否か、又は、差別禁止の判断要素とするか、

② 合理的配慮の拒否そのものを差別として違法とするか、又は、その拒否により差別が生じていることを違法とするか、

といった点が検討課題として考えられる。

①については、アメリカ及びフランスにおいても、合理的配慮の拒否を差別として禁止することにより、実質的には使用者に合理的配慮を行うことを義務付けていることになるので、各国に大きな相違はないと考えられる。

②については、フランス及びドイツでは、合理的配慮の拒否そのものを違法としている法制度になっているが、実際の紛争においては、差別又は不利益待遇の禁止を理由とした損害賠償請求等の形で争われている。

いずれの国でも、実質的には合理的配慮の拒否により何らかの差別が生じていることに対して救済を図っている点では相違がないと考えられるが、我が国において、どのような法律構成とするかについては、検討が必要である。

2 差別が禁止される事項

雇用に関し、差別が禁止される事項は具体的にどのようなものか。その際、我が国の制度、慣習等との関係をどう考えるか。

<主な意見>

- 採用差別について、立証の問題や、事案への手当て・対応が難しい面はあるが、立証できるものまで排除すべきではなく、条約でも明記されているので、それを除外することはできないのではないか。(第6回・東氏)
- 採用差別については、最高裁は採用の自由を金科玉条の如く考えており、また、企業側も採用に関しては、男女雇用機会均等法の時と同様、相当強く抵抗すると思われ、特に紛争解決(判定機能)を考えると、最も難しいのではないか。(第10回・岩村委員)
- 電話ができることを採用条件にしている場合があるが、明らかな差別ではないか。(第4回・高岡氏/同旨意見…松本氏)
- 採用時の評価において、本人の適性や能力ではなく、疾患名による偏見で判断する差別が見られるが、健康診断による病気の把握も、結果として就職差別につながるおそれがあるのではないか。(第7回・坂本氏)
- 中途視覚障害者について賃金を引き下げたり、解雇・退職勧奨をしたり、障害年金受給者は年金分を差し引くのは差別であり、禁止すべきではないか。(第4回・時任氏)
- ほとんど給料が上がらない、ずっと臨時雇用のままという事例があるが、能力の問題はあるにしても、人事方針としておかしいのではないか。(第7回・東川氏)
- 障害を理由とするハラスメントを防止する必要があるのではないか。(第11回・花井委員)
- ハラスメントについては、与野党で検討中の障害者虐待防止法案の中に確か入っているので、そちらで対応すると整理できるのではないか。(第11回・大久保委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

各国において異なる取扱いが見られる事項については、国ごとの制度、慣習等によって異なり得るものであり、慎重な検討が必要ではないかと考えられる。特に、以下の点については、我が国の制度、慣習等に照らして様々な問題が生じ得ると考えられる。

①募集及び採用

我が国では、採用に関しては事業主に広範な裁量があると考えられており、例えば、性別による差別禁止(雇用機会均等法第5条)や年齢による差別禁止(雇用対策法第10条)についても、「募

集・採用の機会」について差別を禁止しているところである（これらは、応募条件からの排除など募集・採用の機会の均等を確保すべきことを規定しているが、採用の結果の平等の確保までを求めているわけではない）。

また、採用については、具体的紛争において差別の存在が認められたとしても、他の応募者がいる中で、当該障害者を採用すべきとまでは（少なくとも行政・司法機関等は）直ちに判断できないため、担保措置についても難しい面がある。

②賃金、安全衛生その他の労働条件

我が国では、職務内容と賃金との関係が明確でなく、年齢、家族構成等様々な要素から賃金が決められており（そもそも賃金は労使間で決定すべきとのみ規定され、賃金額の決定要素は規定がない）、実際に障害を理由とした差別であるか否かをどのように判断するか大きな課題である。

差別の有無は合理的配慮判断と関連し、シロクロを単純につけられるものではない中で、どのように差別禁止を担保するかについては、さらに検討する必要がある。

第3 職場における合理的配慮

1 「合理的配慮」の内容

合理的配慮は、個別性の強い概念であるが、その基本的な内容をどのように捉えるべきか。

<主な意見>

- 「合理的配慮」は言葉としては新しいものではあるが、社会的実態は存在しており、モラルからルールに転化すると捉えられるのではないか。(第6回・東氏)
- 合理的配慮を個人の権利として認めるような仕組みへの転換が必要だと思うが、そうするとかなり大がかりな改正になるのではないか。(第8回・松井委員)
- 合理的配慮は使用者の義務か、労働者の権利かと言えば、民間企業には経営権や株主への責務もあるので、まずは使用者の義務ではないか。(第4回・森委員/同旨意見…今井委員)
- 今までの障害者雇用施策(行政が企業に対する助成を行い、物事を進めるアプローチ)と180度異なり、合理的配慮は、個別の労働者との関係で問題となるものであり、個別の労働者が権利要求なり何なりのアクションをしない限り何も動かないことになるので、紛争解決のための支援も含め、考えていく必要があるのではないか。(第10回・岩村委員) 【再掲】
- 特に発達障害系の方は、自分がどのような配慮をしてほしいか、説明すること自体に困難を抱えている人が多く、本人に代わって説明してくれる人が必要になり、こういうものをビルトインすべきではないか。(第10回、11回・今井委員)
- いきなり紛争解決というのではなく、企業の中に苦情処理・権利擁護をしてくれるような仕組みを、(障害者職業生活相談員制度を機能させる等も含め、)考える必要があるのではないか(第10回・今井委員/同旨意見…松井委員)
- 合理的配慮義務を労働基準法の中に位置付けることについては、刑罰法規であり、合理的配慮の範囲等を法律で厳格・明確に定める必要があるため、却ってその範囲が刑罰で制裁すべきものに縮減されてしまうのではないか。また、合理的配慮を制裁を背景にしてやるのが適切なアプローチかという問題があるのではないか。(第10回・岩村委員)
- 合理的配慮の概念は法律で定め、具体的内容は指針で定めるのがよいのではないか。そのためにどのくらい費用がかかるのか等を研究して、時間をかけて指針を作ることが必要ではないか。(第8回・花井委員)
- 何が差別なのか、何が合理的配慮なのか、物差しとしての法律的な基準を示すこと

が必要ではないか。(第6回・東氏)

- 個別企業で障害者へのサポートを求めていくのは本当に大変であり、国がガイドラインをつくる等、法的にバックアップされることが必要ではないか。(第4回・福島氏)
- 合理的配慮を、本人の要望を受けて(費用負担の問題は後回しにして)直ちに提供できるようにすべきではないか。(第4回・高岡氏)
- 合理的配慮のポイントは、(ア)賃金補填、(イ)人的支援(通勤時の支援、ジョブコーチ等)、(ウ)医療(定期通院、有給休暇)、(エ)施設・建物の配慮ではないか。(第6回・藤井氏)
- 精神障害者の場合、対人関係やコミュニケーションがうまくいかない、疲れやすい等の特性があり、グループ就労や短時間労働など、特性に配慮した仕事の確保や職場環境の整備がその能力を引き出すことになる。(第4回・川崎委員)
- 精神障害者については、ちょっとした日常茶飯事的な苦情・相談ができるような窓口が、就労継続する上で必要ではないか。(第11回・川崎委員)
- 視覚障害者にとって移動、文字処理、コミュニケーションが大変であるが、補助機器だけでは無理で、人的な支援、ヒューマンアシスタンスが必要ではないか。(第4回・時任氏)
- 聴覚障害者は、就労した後に十分なコミュニケーション支援がないと離転職・昇進差別に直面する。補聴システムや要約筆記、手話通訳や会議での情報保障等が必要。(第4回・高岡氏)
- 盲ろう者にとって、情報を得ること、コミュニケーションをとること、移動することの3つが困難である。情報保障については、視覚障害者と同様、点字、拡大文字で情報が提供されること、コミュニケーションについては、盲・難聴の方と同様、適切な通訳者や情報提供者を配置することが重要。(第4回・福島氏)
- 難病がある人に対する雇用管理上の配慮として重要なものは、①定期的な通院への配慮、②採用時や採用後の差別のない人事方針、③休憩・休暇・疾患管理への配慮(休憩スペースの確保や、制服を着られない皮膚疾患患者への配慮等を含む)、④フレックス勤務等の柔軟な勤務体制が挙げられるのではないか。(第7回・坂本氏)
- 心臓病等の内部障害者についても、通院のための休暇や、血流が悪くならないようネクタイの不着用等の配慮のほか、やはりフレックスタイムと在宅勤務をお願いしたい。(第7回・米田氏)
- 中途障害者に対する配慮・再配置義務も必要ではないか。(第11回・花井委員)
- 障害者が合理的配慮の提供を求めたことに対する不利益取扱いを禁止すべきではないか。(第11回・花井委員)

- 公務員試験でさえも、採用試験時にコミュニケーション支援を要望してもつけられないことがある。(第4回・高岡氏／同旨意見…東川氏)
- 能力のない人に下駄をはかせる必要はないが、あまりに長時間の試験は避ける、休憩を間に入れる等、能力を正しく判定できるような試験制度にすることが合理的配慮ではないか。(第7回・大濱氏)
- 資格試験においても、合理的配慮(情報コミュニケーション・試験時間等)を講ずべきではないか。(第4回・松本氏／同旨意見…時任氏)
- 通勤時の移動支援、身体介助等は、会社の合理的配慮というよりむしろ自立支援法上のものにしていくべきではないか。(第6回・東氏)
- 労災は通勤から対象となっており、今後は、通勤も職務と連動するので労働政策で考えるべきではないか。(第6回・藤井氏／同旨意見…森委員)
- 知的障害者が気軽に相談でき、苦情を訴えられる窓口が必要ではないか。障害者職業生活相談員の選任義務がない障害者5人未満の中小企業でも、相談・苦情受付の窓口を整備したり、相談員の機能を見直すことが必要ではないか。(第5回・大久保委員／同旨意見…川崎委員、高岡氏、福島氏)
- (精神障害者の場合、職場内だけでなく帰宅後の生活面も含めて24時間体制の支援が必要であり、)企業の障害者職業生活相談員だけでなく、障害者就業・生活支援センターの就労支援担当を増やすなど体制を強化し、連携を図ることが重要ではないか。(第11回・川崎委員)
- 発達障害の場合、構造化(指示の仕方等、物事を分かりやすく整理する)することや折衝等の不得手な業務を除外するとともに、障害特性が分かりにくいので、適切な変更・調整を行えるスキルを持った身近にいるサポーター(ナチュラルサポーター)を助成・支援することが必要ではないか。(第5回・今井委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

アメリカにおいては、EEOCのガイドラインや裁判例において、以下のような内容が示されている。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1) 施設・情報へのアクセシビリティ | 2) 職務の再編成 |
| 3) 勤務地の変更 | 4) 労働時間の変更・休暇の付与 |
| 5) 空席の職位への配置転換 | 6) 企業内外における教育訓練・試験 |
| 7) 援助者・介助者の配置 | |

実際に紛争が生じた場合に、最終的に民事裁判で確定するまで、相当長期間を要するおそれがあり、具体的紛争となる前に、事業主、障害者双方にとって、どのような配慮が必要が明らかにしておくことが望ましい。このため、合理的配慮が必要な状況や配慮の内容、過度の負担に該当

するか否か等についてのガイドラインを策定するとともに、それらを含め、差別が争われた事例について収集し、その概要をまとめることが望ましいと考えられる。

2 過度の負担

合理的配慮の提供義務を負わない「過度の負担」となるのは、具体的にどの程度の負担なのか。また、公的機関からの支援との関係をどのように考えるか。

<主な意見>

- 合理的配慮の基準としては、企業規模、業種、従業員数、環境の特性、企業の属している地域の文化・慣習等を参考にして判断すべきではないか。(第4回・森委員)
- 判例では、①会社の事業規模から見れば人員をやりくりできるとして、長期休職職員の解雇を無効とした例、②治癒の見込みが立たず、事業規模も非常に小さいとして、解雇が適法と認められた例があり、事業規模をある程度考慮せざるを得ないのではないか。また、代替業務が可能として、休職扱いを無効とした裁判例もある。(第8回・大濱氏)
- 低いレベルで過度の負担と認定されると合理的配慮が役に立たなくなるので、「極めて困難な場合」として、アメリカの雇用機会均等委員会ガイドラインのような具体的な指針を作成するのがよいのではないか。(第6回・東氏)
- 「過度」の負担の線引きは非常に難しいが、1つのアイデアとしては、納付金制度の特別費用を参考にすることも考えられるのではないか。(第10回・平田氏(田中委員代理))
- 納付金制度に基づく助成金は、合理的配慮を具体化したものであり、状況に応じた助成措置の改正により合理的配慮を実効あるものにしていくのがよいのではないか。(第4回・森委員/同旨意見…高岡氏、東氏)
- 雇用率制度の対象でない事業主も含めて全ての事業主を対象とすると、合理的配慮に対する財政支援をどのような枠組みで行えるかが問題になるのではないか。(第9回・松井委員/同旨意見…岩村委員)
- 労働制度の補助金やサポートには期限があるが、合理的配慮の前提の仕組みとして、期限を付けない制度を確立してほしい。(第6回・鈴木氏/同旨意見…大濱氏)
- フランスのように、納付金を活用して合理的配慮に必要な経費をカバーするのは、日本の今の法定雇用率で考えると賄えないのではないか。(第8回・松井委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

どのような配慮が「過度の負担」と言えるかについては、個々の事例によって異なり、詳細な基準を設けることは困難であり、アメリカのように、判断基準を明確にするとともに、事例の蓄積を行っていくことが考えられる。

なお、「合理的配慮」のうち、特に作業施設・設備の整備や援助者の配置等、経費を要する事

項については、フランスにおいては、法律上、企業に提供される様々な助成・支援を考慮した上で、求められる配慮に係る負担が過重か否かを判断することとされている。納付金の支払先である Agefigh（非営利民間組織：association privée）からの助成措置は、制度的に「合理的配慮」と関連づけられている。

我が国の納付金制度に基づく助成金は障害者雇用のための設備整備等に対して奨励的に行うものであり仮にフランスのように「過度の負担」と助成・支援と関連づけるとすると、現行の納付金制度のあり方について見直すことも必要である。

第4 権利保護（紛争解決手続）の在り方

1 企業内における紛争解決手続

具体的な紛争になる前に、定期的な意見交換や、使用者側と障害者側の話し合いにより、適切な合理的配慮がなされるような枠組みが必要ではないか。（P）

<主な意見>

- 必ずしも事業主が直接差別する場合だけではなく、紛争に持ち込まなくても済むような、当事者による問題解決を促進する枠組みも必要ではないか。労働安全衛生委員会のような、それに代わり得るような、定期的に問題を話し合える場をうまく設定できないか。（第8回、第10回、第11回・今井委員）
- できるかどうか分からないが、採用の際に、企業と本人との間で合理的配慮の内容について申し合わせをする、アセスメントを得ておいて、その後フォローアップしていく、というのも考えられるのではないか。（第11回・大久保委員）
- 具体的には今後検討すべきものだが、例えば配慮推進会議のようなものを設けて、使用者、労働者、障害者の3者が入って定期的に打ち合わせを行うことが考えられるのではないか。（第11回・今井委員）

2 外部機関による紛争解決手続

具体的に差別があった場合に、裁判で争う以外に、外部機関による何らかの紛争解決手続が必要ではないか。

<主な意見>

- 差別があっても個別に訴訟を起こさないと解決しないような仕組みは適切ではなく、外部の機関に救済や是正（勧告）を求められる仕組みが必要ではないか。（第5回・今井委員／同旨意見…山岡氏）
- 差別という違法の修復には、企業内の障害者職場定着推進チームの権限を強めて、使用者、障害者、第3者による組織で対応するのがよいのではないか。さらに、紛争を処理する委員会を、国・行政から独立した機関・第3者機関として作る必要があるのではないか。（第4回・森委員）
- 人権擁護法案のように、紛争調整委員会の中で、労働法の専門家だけでなく、障害者のことが分かる者もメンバーとなって調整機能を果たす形がいいのではないか。（第8回・松井委員／同旨意見…岩村委員）

- 国や県の委員会等、外部機関による紛争解決は必要ではあるが、当事者間の自浄作用を促進するような仕組みがやはり必要ではないか。(第8回・今井委員)【再掲】
- 紛争解決に当たっては、手続や証拠の採否・立証等の厳格さをどこまで求めるかということも考える必要があるのではないか。(第10回・岩村委員)
- 新たに機関をつくるのではなく、実現可能性が高い機関を活用した方がいいのではないか。人権委員会は実現可能性が高いと言えないので、都道府県労働局の紛争調整委員会を活用することが考えられるが、出頭命令を設ける等の権限の強化や、当事者参画等の体制の強化が必要ではないか。(第8回、第11回・花井委員)
- 直接差別事案等に対する判定機能をどうするかについては、行政機関タイプの判定機関では結局裁判まで行って二重の手続をやる可能性がある。仮に紛争調整委員会等に判定機能を持たせるならば、手続自体が早く終わるように構築する必要があるのではないか。(第10回・岩村委員)
- 司法的な効果としては、直接差別・間接差別は損害賠償・無効確認・地位保全・地位確認があるのに対し、合理的配慮の不提供の場合は、損害賠償のほか作為義務に基づく作為請求があると思うが、行政救済手段がないので、行政機関による差別是正の勧告又は命令権限が付与されるべきではないか。(第6回・東氏)
- 条約実施を促進・保護・監視する枠組み(条約第33条)として、労働分野に限ったものとするのか、包括的にやるのかという論点があるが、独立機関を作る必要があるのではないか。(第6回・東氏)
- 紛争解決機関とは別に、この研究会ではモニタリング機関について言及されていないが、検討すべきではないか。(第11回・森委員)

<参考>「我が国における「合理的配慮」のあり方について(論点整理)」

アメリカにおいては、裁判所に提訴する前に EEOC (雇用機会均等委員会) への申立てをすることとされている。EEOC は、事業主に対し、調査を経て協議・調整・説得を行うほか、180 日 (=EEOC が排他的管轄権) 経過後も解決しない場合、EEOC が自ら原告となって提訴するか、被害者に訴権付与通知を送達することとされている。

フランスにおいては、独立行政機関である HALDE (高等差別禁止平等機関) が、提訴を受けて、調停や和解金支払いの提案・勧告を行う。〔中略〕

事業主が講ずべき「合理的配慮」については、ハローワーク等の行政機関が助言、指導等をするとともに、具体的な差別事案に対しては、個々の事業主や障害者の状況に応じて、事業主が講ずべき合理的配慮がどの程度かを慎重に検討しながら差別の有無を判断する必要があるとともに、何らかの差別があった場合にどのような措置を講ずべきか、双方の立場を踏まえて判断することが望ましいと考えられる。具体的にどのような機関がこのような調整的な紛争処理手続を担うべきかについては、さらに検討する必要がある。

第5 その他

<主な意見>

1 障害の定義

- 現行の障害者等級は医学的・機能的観点から作成されているが、職業能力に応じた職業等級を創設する必要があるのではないか。(第4回・森委員／同旨意見…今井委員・東氏)
- 職業能力に応じた障害認定については、ドイツでも失敗したように、この仕事については何パーセントという形で客観的に認定するのは容易ではなく、機能障害プラスアルファとして能力や環境の側面を合わせて、恒久的な形で認定するような仕組みが有効ではないか。(第9回・松井委員)
- わが国の聴覚障害者の定義が国際的に非常に低く、重度の難聴者しか身体障害者福祉法の対象にならない。(第4回・高岡氏)

2 障害者雇用率制度

- 精神障害者は雇用義務化されていないために雇用が進んでいない。他障害との差別が生じており、条約の差別禁止に即していないのではないか。(第4回・川崎委員)
- 視覚障害者の雇用が置き去りにされている部分があるため、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・内部障害・知的障害・精神障害それぞれの法定雇用率の枠を定めてほしい。(第4回・時任氏)
- 障害種別に雇用率を設定することがいいとは言い切れず、知的障害者は一番少ないので、パーセントで設定するのは難しいのではないか。(第5回・大久保委員)
- 法定雇用率を増加すべきではないか。(第5回・小金澤氏／同旨意見…大久保委員・鈴木氏)
- 法定雇用率は、高すぎると企業が却って嫌になるかもしれず、予算措置等も活用して、一番実効性のあるような形に工夫してもっていくことが重要ではないか。(第9回・大久保委員)
- 3障害一元化といった問題もあり、精神障害者の義務化を盛り込んでいただきたい。条約批准に際して、精神障害や発達障害を雇用義務の対象に位置付けるべきではないか。(第9回・川崎委員、松井委員)
- 就労継続支援事業等に優先発注した場合に雇用率に算入して考える方法もあるのではないか。(第6回・鈴木氏／同旨意見…森委員)
- 公的機関が発注する際には、障害者雇用義務の達成を要件とすべきではないか。(第11回・花井委員)
- 現行は「特別費用」の額として算出している納付金の額を、最低賃金とリンクしたのものとして考えられないか。(第4回・森委員)

3 ダブルカウント

- 0.5 カウントも含め、障害当事者からすると気分がよくないもので、差別を感じ

る方の立場に立って検討してほしい。(第6回・藤井氏)

- ダブルカウントの問題は非常に難しい問題で、1対1と捉えるべきという考えもだいぶある。一方で、いろいろ知恵を絞ってやってきており、また短時間労働の0.5カウントもあることも考慮すべきではないか。(第4回、第6回・森委員)

4 福祉的就労・保護雇用

- 就労継続支援A型事業は、雇用契約とサービス契約との二重契約になり、働いているのに利用料を取られるのはおかしいのではないか。また、能開校での訓練では手当てが出るのに福祉サービスを使うと利用料が発生するのは是正してほしい。(第6回・鈴木氏／同旨意見…森委員)
- 就労継続支援B型等の福祉的就労は、障害者のニーズや、賃金の多寡にかかわらず働く意義を考えればこれをなくすべきとは言えず、企業就労への移行や賃金の確保を図るべきではないか。A型については、障害者は利用者であり従業員でもあるわけだが、やはり労働者と位置付けて、雇用施策の中で扱うべきではないか。(第5回・大久保委員／第5回・今井委員)
- 福祉的就労は、労働法令からの除外になっているのは問題ではないか。労働へのニーズがある場合には、雇用施策が介入すべきではないか。福祉的就労イコール合理的配慮除外というのはおかしいのではないか。(第6回・藤井氏)
- 一般就労のみではなくて、保護的・福祉的な就労を重視することも必要なのではないか。その際、工賃が低いので、ヨーロッパの賃金補填や、年金制度等も含めて働く権利を充実・強化していくことが大事ではないか。(第6回・鈴木氏)

5 特例子会社

- 特例子会社そのものをすぐ否定するものではないが、障害者がずっと固定的に働き続けるという形ではなく、そこから親会社等に移動していく仕組み等を考えることも大切ではないか。(第5回・大久保委員)
- 特例子会社は、企業の視点であり方向性としては解消すべきではないか。ただ、一般労働市場の中では働けない人もいるので、遠い将来はともかく、労働形態としては、障害者が中心となって働く場も現段階ではあってもいいのではないか。(第6回・藤井氏)

6 その他の就労支援策

- 雇用納付金制度に基づく助成金の要件(助成率)を緩和してほしい。(第4回・高岡氏)
- 障害者介助等助成金は、手話通訳は対象であるが、要約筆記や盲ろう者の通訳には対応していない。(第4回・高岡氏)
- 障害者介助等助成金の手話通訳の委嘱について、①事前申請の手続が煩雑であること、②公的機関は使えない、③利用回数に制限があり、また、支給期間は10年と制限があることが問題ではないか。(第4回・松本氏)

- 自営業についての合理的配慮も検討すべきではないか。視覚障害者の場合、「業」の観点では、あはき業は厚労省が所管省庁として検討すべき。自営一般の観点では、開業のための融資を受ける際に代理署名を認めない金融機関があったり、火災の危険を理由に賃貸しないオーナーがいる等、自営の妨げになっている。(第11回・笹川委員)
- 雇用面でのサポートだけでなく、雇用に行くための訓練の場におけるサポート(特に、一般校での受入れ)が必要ではないか。(第11回・松井委員)

7 その他

- 「障害者」を「障害のある人」に、「障害を理由とする」を「障害があることが要因となる」等に直してほしい。また、公定訳を作るに当たっても、各種障害者団体と密接な協議を行ってほしい。(第5回・今井委員／同旨意見…東氏)
- 最低賃金が適用除外制度から減額措置制度になったことは望ましいことであるが、厳格な許可基準をしっかりとしてほしい。また、固定的な状態にならないような指導をしっかりと行うべきではないか。(第5回・大久保委員・同旨意見…東氏)
- 絶対的欠格条項及び相対的欠格条項を見直してほしい。(第5回・小金澤氏)
- 障害基礎年金について、精神障害者の場合は就労できる人は3級となり、基礎年金を受給できなくなるのは、身体・知的障害者と異なる基準になっており、直してほしい。(第5回・小金澤氏)